

花鳥餘情

七



第十九

君榮上



僧正慈海



第二十

君榮下

第二十一

君榮下

銘

花鳥厨情第十九

若菜上

女若菜上

ころ物さうりころととては事いけるうらふ
 つゆのさめると女あて下とていふこと
 かしこく女さうりころとては漢書めろ組の
 記とて女さうりころとていふことと若菜
 女さうりころとていふことと曲礼とて
 記者の故一巻の中とて下あり櫃らとて
 人後人後とていふことと簡策とていふ
 ことと二巻とていふことと河海と
 著説あやまらぬことと女さうりころと
 若菜上とていふことと若菜上とていふ



とらわらむとみおつう下のるめい女三女朱
崔院の平の沛おつうわかたてまつるを
まふとつうとつうふれとつうしきぬた病想
つうとつうとつうとつうとつうとつうとつうとつう
仰きつうとつうとつうとつうとつうとつうとつうとつう
初て若草とつうとつうとつうとつうとつうとつうとつう
あつうとつうとつうとつうとつうとつうとつうとつう
とつう年の事とつうとつうとつうとつうとつうとつうとつう
女とつうとつうとつうとつうとつうとつうとつうとつう
女二女若草とつうとつうとつうとつうとつうとつうとつう
若草とつうとつうとつうとつうとつうとつうとつうとつう
延封沛時兼香^香女沛^後とつうとつうとつうとつうとつうとつうとつう

乃海氏にけ女沛のハ脈ノ康子 詔子母子内親
三人あり戸女とつうとつうとつうとつうとつうとつうとつう
行つとつうとつうとつうとつうとつうとつうとつうとつう
西に女とつうとつうとつうとつうとつうとつうとつうとつう
新国史云仁和四年八月十日有於新造西に新寺
行先帝園志沛斎舎 今東西に女とつうとつう
とつう仁和寺とつうとつうとつうとつうとつうとつうとつう
仁和年中とつうとつうとつうとつうとつうとつうとつうとつう
号とつうとつうとつうとつうとつうとつうとつうとつうとつう
はとつうとつうとつうとつうとつうとつうとつうとつうとつう
のら延封元年十二月十日有於仁和寺とつうとつうとつう
らとつうとつうとつうとつうとつうとつうとつうとつうとつう

金剛界會三摩耶形之云々
天曆六年三月廿七日
天曆六年三月廿七日
天曆六年三月廿七日
天曆六年三月廿七日
天曆六年三月廿七日

あつた

たふさつちのうらたつちのうらたつち

うらたつちの中初をたふさつちのうらたつち
うらたつちのうらたつちのうらたつち

うらたつち十九葉の中初言のうらたつち
た中年あるうらたつちのうらたつち

うらたつちのうらたつちのうらたつち
うらたつちのうらたつちのうらたつち

うらたつちのうらたつちのうらたつち
うらたつちのうらたつちのうらたつち

うらたつちのうらたつちのうらたつち
うらたつちのうらたつちのうらたつち

うらたつち

うらたつちのうらたつちのうらたつち

うらたつちのうらたつちのうらたつち
うらたつちのうらたつちのうらたつち

うらたつちのうらたつちのうらたつち
うらたつちのうらたつちのうらたつち

うらたつちのうらたつちのうらたつち
うらたつちのうらたつちのうらたつち

うらたつちのうらたつちのうらたつち
うらたつちのうらたつちのうらたつち

うらたつちのうらたつちのうらたつち
うらたつちのうらたつちのうらたつち

院
院
院
院
院
院
院
院
院

三
三
三
三
三
三
三
三

三
三
三
三
三
三
三
三

三
三
三
三
三
三
三

入る初言のあきなりと云はれりてなる

こゝ大初言の系圖なりと云はれりての別あり

るをいふは女と云ふの意なりと云はれり

あつた初言のいふに二条の女と云ふは

あつた初言のいふに毎月の女と云ふは

あつた初言のいふに

あつた初言のいふに

あつた初言のいふに

あつた初言のいふに

あつた初言のいふに

あつた初言のいふに

あつた初言のいふに

あつた初言のいふに

あつた初言のいふに

周礼に名古服袴衣袴杖用杖鞠衣展衣縁衣

と云ふに長限を傳へて命戴歩履金璫明弁

冊為貴妃半后服用と云

あつた初言のいふに

唐子内親と云ふは

あつた初言のいふに

あつた初言のいふに

あつた初言のいふに

あつた初言のいふに

あつた初言のいふに

皇位就くおけし宸後あ有るは皇女調和若菜
美美信進いし 案延長二年沖野の醍醐の
御門の沖野之守多門いれど御せし地徳
賢直志は太将門家と系流乃沖野とてまう
母父子の例おつたつとてまよふ月の子
れり守の沖野とてまうと調和とてまうと
しとてまうとあけ物徳乃沖野とてまうと
のまう

ふらふけのめしとてまうとてまう
系流乃自れ沖野の西乃いれとてまう
放出の事しとてまうとてまう
いし守軍扱 地鋪の唐蓮い夫々今集つは

あつた物と或龍野實地鋪の
らて人のいけしとてまうとてまう
らり冬乃沖野とてまう

仁和之年と改つた守方と衣書表五龍野
風有教い
御丁つとてまうとてまう
何器有甚玉再蓋か

ふらふけのめしとてまうとてまう
えあつたのはひ二人のらみ右書信徳は夫と
らつた人まうとてまうとてまう
作つたあまもまうとてまうとてまう
政よまうとてまうとてまうとてまう

川軍を... 一時... の

...

...

...

...

...

...

...

外記云延長二年正月廿五日御賀中務卿教廣

親王以下同兼捕羽衣執捧物惣女捧年廿一

御奉り御小務次侍以下執折摺杖物果捧果

入自日華華門一列五一列庭中一列五位各奏

物名院内膳心忠望平膳入自月花園受持
物出自同門

この御... 後... の物

御記延喜五年正月廿一日保忠令吹笙曲調頗

比藤日賜梅枝等是故入政大臣照宣云弱冠取兼

和天白皇乃令子羽宿所給之寛平中以甚名物分給之

其後乃宣賜收等皇令尋的意以賜之

同延喜十七年四月廿二日自返初宣賜收果書法計

收自奉納書法百の十七卷佳年皆出看竹見又抄所書

不換取之今摸寫而院返納本所只難大教本各細

目觀其歌名或有誤謬仍新作目錄一巻細記是

名也長束乃其計謬加以置之欲得果者見之願有分

別冊又加書法之卷足二百卷凡願子細具者有録即令
右近少将伊衛家系人泚行未拾納之

方小録之乃常行其有未納之

付泚極其景行其有未納之

あつた人あつた人あつた人

あつた人あつた人あつた人あつた人あつた人

あつた人あつた人あつた人あつた人あつた人

あつた人あつた人あつた人あつた人あつた人

あつた人あつた人あつた人あつた人あつた人

あつた人あつた人あつた人あつた人あつた人

あつた人

あつた人あつた人あつた人あつた人あつた人

わんじやうのこころはあらたしきちかきしはるしき
にぞく

海舟のこころはあらたしきちかきしはるしき
にぞく
わんじやうのこころはあらたしきちかきしはるしき
にぞく

わんじやうのこころはあらたしきちかきしはるしき
にぞく

わんじやうのこころはあらたしきちかきしはるしき
にぞく

わんじやうのこころはあらたしきちかきしはるしき
にぞく

わんじやうのこころはあらたしきちかきしはるしき
にぞく

わんじやうのこころはあらたしきちかきしはるしき
にぞく

わんじやうのこころはあらたしきちかきしはるしき
にぞく

わんじやうのこころはあらたしきちかきしはるしき
にぞく

わんじやうのこころはあらたしきちかきしはるしき
にぞく

わんじやうのこころはあらたしきちかきしはるしき
にぞく

わきりしはくしむるあはれす ちかぬくも

海よりまじりてのあはれ

東交の清くはらけはるるを

あしはれまゝの女侍りるはくし海女

母女侍とさるるあはれ

あしはれまじりてはるるあはれ

あしはれ

承平七年十一月十日 湯成院清くはらけ西教出

才之間を螺銅侍り

し葉は名と清くはらけ二条院しはらけ

あしはれまじりてはるるあはれ

あしはれまじりてはるるあはれ

あしはれ

承平七年十二月十日 湯成院清くはらけ

あしはれまじりてはるるあはれ

首八合各有黒け志後露

清涼院のあはれ 延喜十六年 儲平敷清くはらけ

札五脚納るるあはれ 積難帛各あり

承平四年三月廿七日 常寧院有中官清くはらけ

帳甚東邊に三人の厨子云基

あしはれまじりてはるるあはれ

あしはれまじりてはるるあはれ

承平三年仁明天皇 早御賀御拝以甚造院

あしはれまじりてはるるあはれ

延和元年十月十日
延和元年十月十日
延和元年十月十日

延和元年十月十日
延和元年十月十日
延和元年十月十日

延和元年十月十日

延和元年十月十日
延和元年十月十日
延和元年十月十日

延和元年十月十日
延和元年十月十日
延和元年十月十日

延和元年十月十日

延和元年十月十日
延和元年十月十日
延和元年十月十日

七六寺

東大寺 聖武天皇神龜五年始造之、興福寺 不比等和銅三年造山階寺是也
元興寺 推古天皇崇峻天皇元年始造之飛鳥寺本、法興寺
大安寺 皇極天皇元年始造之我馬子大臣造之和銅三年遷造之本名百濟寺
藥師寺 天智天皇元年造之天武天皇、西大寺 高野天皇天平勝寶元年創之
法隆寺 聖德太子号伊香留香寺 拾芥 至天平神護元年十七年造畢

通

延和元年十月十日
延和元年十月十日
延和元年十月十日

延和元年十月十日
延和元年十月十日
延和元年十月十日

延長二年三月十日
延長二年三月十日

延長二年十月十日
延長二年十月十日

延長二年十月十日

延長二年十月十日
延長二年十月十日

延長二年十月十日
延長二年十月十日

延長二年十月十日

延長二年十月十日
延長二年十月十日

延長二年十月十日
延長二年十月十日

延長二年十月十日
延長二年十月十日

延長二年十月十日
延長二年十月十日

河海のあはれん史記のあはれん今事
あはれんあはれんあはれん

あはれんあはれんあはれんあはれん

このあはれんあはれんあはれんあはれん

あはれんあはれんあはれんあはれん

延長二年正月廿二日自宇多院被奉若菜お
内裏院川生物市馬宇多入自日華門御人次百馬寮
給内は奉奉と宣百馬寮
大退去と馬寮
と案延長乃は賀のあはれん世王の院よりあはれん

穀倉院二條南朱雀西在太宇西納畿内諸國銅錢無主位職田
及没官田太宰稻等諸庄物勤年中饗有公卿及四位五位別當
預藏人等或云朱雀門前

ありて院の中や^福結りて^福を^福内裏に
て^福を^福内裏に^福わ^福く^福は^福後^福あり^福て^福は^福わ^福り^福
官人ありて^福を^福内裏に^福わ^福け^福て^福は^福わ^福り^福
内裏より^福を^福内裏に^福わ^福け^福て^福は^福わ^福り^福
六府の官人ありて^福を^福内裏に^福わ^福け^福て^福は^福わ^福り^福
法皇は御^福を^福内裏に^福わ^福け^福て^福は^福わ^福り^福
時々の定^福を^福内裏に^福わ^福け^福て^福は^福わ^福り^福
是^福乃^福中^福に^福わ^福り^福
萬歳樂平調
賀王恩大食調拾六
これ^福乃^福中^福に^福わ^福り^福
は^福乃^福中^福に^福わ^福り^福
あり^福舞^福あり^福
は^福乃^福中^福に^福わ^福り^福

は^福乃^福中^福に^福わ^福り^福
え^福乃^福中^福に^福わ^福り^福
乃^福乃^福中^福に^福わ^福り^福
延長三年十二月五日申^福を^福内裏に^福わ^福け^福て^福は^福わ^福り^福
延長三年十二月五日申
宴^福乃^福中^福に^福わ^福り^福
廂^福乃^福中^福に^福わ^福り^福
令同和
御時茶珠
次^福乃^福中^福に^福わ^福り^福
貞^福乃^福中^福に^福わ^福り^福
文^福乃^福中^福に^福わ^福り^福
万^福乃^福中^福に^福わ^福り^福
出^福乃^福中^福に^福わ^福り^福

御中
延長元年七月廿日

延長元年七月廿日
延長元年七月廿日

延長元年七月廿日
延長元年七月廿日

延長元年七月廿日

延長元年七月廿日

延長元年七月廿日

延長元年七月廿日

延長元年七月廿日

延長元年七月廿日

延長元年七月廿日

延長元年七月廿日

延長元年七月廿日

延長元年七月廿日

過現因果經云至善普光佛乃慈行。出與于世亦時善慧心
人因于五百外道論議破其異見。取五百金來為弟子者
以銀錢一枚上之善惠。因佛出與。今燈照王迎請。倍養
較手鼓唱。令國內名花皆不得買。悉以輸王。善惠心
周。天憐愍。欲訪花。所忽遇。明佳夫持花七莖。與王
剖令。藏著。群中。善惠至誠。感花。踊上。追呼。執買。此女
不言。當送。內宮。欲以。上佛。不可。得也。善惠告言。五百
銀錢。雇五莖花。明佳夫。問曰。欲花何用。善惠答曰。為欲。成
言。欲以。獻佛。明佳夫。又問。欲佛何為。善惠答曰。為欲。成
就一切。種智。度脫。眾生。明佳夫。答言。今此。男子。乃志
誠。不惜。錢寶。而。語。曰。我。今。當。以。此。花。相。與。願。我。生。
常。為。君。妻。善。惠。答。言。我。後。梵。行。求。無。為。道。不得。相

許生死之緣。明佳夫即言。不從我願。花不可得。善惠
又曰。汝若決定。不與我花。當從。汝願。我好。布施。道人
善惠。若使。有求。從我。求乞。願。目。龍。胞。及。子。妻。子。汝。莫。生。疑
懷。吾。施。心。明。佳。夫。答。言。敬。從。來。命。今。我。女。弱。不。能。得。前
併。寄。二。花。以。獻。於。佛。使。我。生。不。失。此。願。好。醜。不。難。必
置。心。中。今。佛。如。時。灯。照。王。領。諸。官。廣。持。妙。香。華
種。供。具。出。城。迎。佛。王。臣。禮。敬。散。獻。名。花。志。墮。地。
善。惠。見。諸。人。俱。供。養。畢。已。諦。觀。如。來。相。好。容。顏。滿
種。智。度。復。來。生。故。則。散。五。花。皆。任。意。中。化。成。花。其。華。
落。散。二。莖。亦。上。於。宮。今。時。王。氏。龍。天。八。部。見。此。奇。特。
歎。未。嘗。有。於。是。善。克。如。來。讚。曰。善。哉。汝。以。是。行。過。
信。祇。劫。當。得。成。佛。身。曰。釋迦。年。厄。既。授。記。佛。蓮。行。處。

而地漏善惡即脫所著度信(衣)以用布地解繫
覆(オホク)佛踐而度復記(口)汝後得佛當於五濁惡
世度諸天人不以為難(心)我也時善惡投佛(心)家
自言世尊我昨得汝五種(手)一者夢(口)大海
二者夢(口)枕須弥三者夢(衆)泉生入我身内四者夢(手)
執日五者夢(手)執月唯願世尊為我解說善惡
各言夢(口)臥海者汝在生死大海中夢(口)枕須弥者
忘於生死夢(衆)泉生入身内者為我作佛依(心)夢(口)
執日者智光普照夢(手)執月者清涼度生念(心)離執(心)
執首(因)是汝將來成佛相善惡聞(心)不勝(心)踊躍(心)慶(心)逢(心)
今案内曲(外)曲(一)言(一)夢(一)事(一)行(一)也
之(一)也(一)事(一)之(一)功(一)徳(一)一(一)言(一)不(一)善(一)惡(一)也(一)乃(一)又(一)行(一)の

一(一)夢(一)事(一)之(一)功(一)徳(一)一(一)言(一)不(一)善(一)惡(一)也(一)乃(一)又(一)行(一)の
一(一)夢(一)事(一)之(一)功(一)徳(一)一(一)言(一)不(一)善(一)惡(一)也(一)乃(一)又(一)行(一)の
須弥と(一)一(一)枕(一)須(一)弥(一)と(一)蘇(一)迷(一)盧(一)山(一)唐(一)と(一)妙(一)言(一)と(一)
一(一)言(一)不(一)善(一)惡(一)也(一)乃(一)又(一)行(一)の
入(一)身(一)事(一)一(一)八(一)万(一)由(一)旬(一)は(一)出(一)る(一)半(一)八(一)万(一)由(一)旬(一)合(一)て(一)十(一)六
万(一)由(一)旬(一)の(一)心(一)一(一)言(一)不(一)善(一)惡(一)也(一)乃(一)又(一)行(一)の
一(一)夢(一)事(一)之(一)功(一)徳(一)一(一)言(一)不(一)善(一)惡(一)也(一)乃(一)又(一)行(一)の
小(一)の(一)心(一)一(一)言(一)不(一)善(一)惡(一)也(一)乃(一)又(一)行(一)の
照(一)と(一)一(一)言(一)不(一)善(一)惡(一)也(一)乃(一)又(一)行(一)の
い(一)ま(一)わ(一)ん(一)と(一)一(一)言(一)不(一)善(一)惡(一)也(一)乃(一)又(一)行(一)の
そ(一)の(一)心(一)一(一)言(一)不(一)善(一)惡(一)也(一)乃(一)又(一)行(一)の
て(一)は(一)一(一)言(一)不(一)善(一)惡(一)也(一)乃(一)又(一)行(一)の
と(一)一(一)言(一)不(一)善(一)惡(一)也(一)乃(一)又(一)行(一)の

得い文殊善賢とくつたてしあひの
象代の物いづる指し又あてあはれ
らんまゝ

ふはらひのまきまきしりてまあひん事じあはれ
善守人師の備は誓利原陀安養界還来
穢國度人天志心

あぢまのあまそふさふさのちりま
あまのまのあまの海ま

わらまのほろろあまのあまのあまのあまの
佛涅槃の取三明六通の人羅漢も奉身毛筆
遍躰血現沙汰益月牛上人菩提と大程のんり
らうのいしりまのあまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまのあまのあまの

とてかゝるはあつてはな

。 ^千 戸桐のきりこ ^加 右集の巻

のまじりたる本はよきものなりとてはな

とてはなとてはなとてはなとてはな

とてはなとてはなとてはなとてはな

^推 推

とてはなとてはなとてはな

とてはなとてはなとてはなとてはな

とてはなとてはなとてはなとてはな

とてはなとてはなとてはなとてはな

とてはなとてはなとてはなとてはな

作あるは毛の時

と葉をよみ本はあつてはなとてはな

と葉をよみ本はあつてはなとてはな

一

とてはなとてはなとてはなとてはな

とてはなとてはなとてはなとてはな

とてはなとてはなとてはなとてはな

とてはな

とてはなとてはなとてはなとてはな

とてはなとてはなとてはなとてはな

とてはなとてはなとてはなとてはな

名を納んとて九月の自これ忌月也
阿闍と礼記の忌りの詞ありて忌月の文を
一忌月ありて忌年ありて一忌月ありて唐
武名の時貞丹と年て軍とて取凱旋の系
と多きと也と忌を帝打忌月と也
一忌月ありて晋穆帝乃例としてはあ
る軍と打忌年と也と一忌月ありて
多忌月と也と一忌月ありて唐
高祖と打忌帝の御忌月ありてはありて
十月ありて一忌月ありて一忌月ありて
多忌月ありて一忌月ありて文粹
ありてあり

この文の...
...
...

孝宗の記元年二年三月十七日後上侍臣於

朱崔沈步射

又天曆四年十月十五日試春宮擬帶刀坊亮

以下類試先試騎射次試步射

と稱しと也乃ち方とていふと一とひりや

とれり...
...

うらり...
...

小石記長保元年九月十九日日者内裏下猶産
子女院たは下石大屋有産養事有衝重院
殿納者衣衣と猶乳母馬命婦取人呼と奇
怪事天下以日者是可有徵^徴未^未同禽歎

用人礼巻平乳イ

此の巻は... 用人の礼... 巻平... 此の巻は... 用人の礼... 巻平...

此の巻は... 用人の礼... 巻平...

此の巻は... 用人の礼... 巻平...

此の巻は... 用人の礼... 巻平...

此の巻は... 用人の礼... 巻平...

此の巻は... 用人の礼... 巻平...

此の巻は... 用人の礼... 巻平...

此の巻は... 用人の礼... 巻平...

十八年... 此の巻は...

此の巻は... 用人の礼... 巻平...

此の巻は... 用人の礼... 巻平...

此の巻は... 用人の礼... 巻平...

此の巻は...

此の巻は... 用人の礼... 巻平...

此の巻は... 用人の礼... 巻平...

此の巻は... 用人の礼... 巻平...

此の巻は... 用人の礼... 巻平...

此の巻は...

此の巻は... 用人の礼... 巻平...

此の巻は... 用人の礼... 巻平...

行り升給り冷泉院

帝より系圖云弘仁十一年四月より延平冷然院
十七日讓位お白鳥天子天曆八年三月十日改冷然
院為冷泉院

冷泉院の行り升行わ冷泉院のつらおら後
つねとあり御沖心よりつらつらとあひつら
多きと思ふやまのつらつらとあひつら

冷泉院のつらつらとあひつらとあひつら
つらつらとあひつらとあひつらとあひつら
つらつらとあひつらとあひつらとあひつら
つらつらとあひつらとあひつらとあひつら
つらつらとあひつらとあひつらとあひつら
つらつらとあひつらとあひつらとあひつら
つらつらとあひつらとあひつらとあひつら
つらつらとあひつらとあひつらとあひつら
つらつらとあひつらとあひつらとあひつら
つらつらとあひつらとあひつらとあひつら

一代つらつらとあひつらとあひつらとあひつら
つらつらとあひつらとあひつらとあひつら

源氏のつらつらとあひつらとあひつらとあひつら
つらつらとあひつらとあひつらとあひつら
つらつらとあひつらとあひつらとあひつら
つらつらとあひつらとあひつらとあひつら
つらつらとあひつらとあひつらとあひつら
つらつらとあひつらとあひつらとあひつら
つらつらとあひつらとあひつらとあひつら
つらつらとあひつらとあひつらとあひつら
つらつらとあひつらとあひつらとあひつら
つらつらとあひつらとあひつらとあひつら

つらつらとあひつらとあひつらとあひつら
つらつらとあひつらとあひつらとあひつら
つらつらとあひつらとあひつらとあひつら
つらつらとあひつらとあひつらとあひつら
つらつらとあひつらとあひつらとあひつら
つらつらとあひつらとあひつらとあひつら
つらつらとあひつらとあひつらとあひつら
つらつらとあひつらとあひつらとあひつら
つらつらとあひつらとあひつらとあひつら
つらつらとあひつらとあひつらとあひつら

長保六年九月十日御堂河内の時隨身家

糸石清水并住吉給東極神未未る
と兼源氏系相具其基上系相信者唯
はく才て志くりたありやけるあらむ
はたらあいんりやあらむん

交野大領孫益女之藤之客通生女之兼善
淑女の生延善帝

うけはらいいめらいいるらいいはらいい
又書書あらむらいいるらいいはらいい

舞人いあらむらいいはらいいはらいい
ちりいあらむらいいはらいい

舞人い十人石清水舞の條時意あらむ
兼府のいいはらいいはらいいはらいい

云信者いあらむらいいはらいいはらいい
もらいいはらいいはらいいはらいい
それを兼兼の射あ物あ春日意と意役あの時
舞人陪後いあらむらいいはらいい
兼兼と兼陣とその所いあらむらいい
いあらむらいいいはらいいはらいい
沛いあらむらいいはらいいはらいい
は種あらむらいいはらいいはらいい
いあらむらいいいはらいいはらいい
の志いあらむらいいはらいいはらいい
田いあらむらいいはらいいはらいい
東交のいはらいいはらいいはらいい

かゝる人の子を漢家申す多ありあ
申し又清浦さるる一海軍のころる
のらうたのふのされい高き新なる時
とあやまらしてゆかぬゆつたは海軍の
統とあまらく冥明のゆつたの風例
いりてま

ふいしりふあまらて 神楽の神楽

入道のみとてあまらて 朱雀流

れは事

二ふりて清あまらて

禄令一品親と封六百戸 位田六十町 三品食封四百戸
禄令一品親と封六百戸 位田六十町 二品食封四百戸
位田五十町 四品食封三百戸 位田四十町 内親王位十

百戸を位田二ふ六十町三ふ六十町内親王

封減半位田減三分一

と案二ふ内親王の封二十五戸位田十町行海

いりてあまらて

このまらてあまらて

女二ふあまら

いりてあまらて

樂書曰所文の象易寒暑者深冬に感動凡

雷と禱琴中と琴書曰所曠音の樂官之上

於取能易寒暑者凡雨為吾年之敷に感玄鶴

六下舞

いりてあまらて

月夜の静けさ
なほとていふ

月夜は静けさ
朱簾のひびく

わきまをわけて
あはれをいふ

あはれをいふ
あはれをいふ

樂書之琴動天地感鬼神

こころあはれきつりつりあはれ

波 羅 門 信 正 始 渡 本 朝 之 但 允 奉 天 皇 文 武 天

皇 上 彈 琴 終 焉

きんこころあはれきつりつりあはれ

こころあはれきつりつりあはれ

わたりつりつりあはれ

院 乃 多 之 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

院乃らるるにまゝあまこひよひくらくを

この院の朱雀院とあり

とありしはこころあまこひよひくらくを

あまこひよひくらくを

こころあまこひよひくらくを

けいりくらくを

多しとあり

中納言相當從三位 殿原

あまこひよひくらくを

の相向三位の祀多侍紫とあり

こころあまこひよひくらくを

思ふまゝあり

こころあまこひよひくらくを

てあり 猶もあまこひよひくらくを

こころあまこひよひくらくを

こころあまこひよひくらくを

思ふまゝあり

こころあまこひよひくらくを

けいりくらくを

こころあまこひよひくらくを

あまこひよひくらくを

あまこひよひくらくを 二条の寺名あり

この寺

す法と種あり

こころあまこひよひくらくを

入般若心経法華焼換神氣是く中福弁明神告

自宗法師信事 見延長八年事ア一と記

弁交りたり信事 見延長八年事ア一と記

新交家心語内七言

佛フツクシ 徑ミヤカミ 塔アツクキ 寺コリクキ 香カ 雄ト 信チミカ 尼ツクサ 弁カクサシ

この事ア一と記 見延長八年事ア一と記

心ココロの事コトは 信チミカの事コトは 塔アツクキの事コトは 寺コリクキの事コトは 香カの事コトは 雄トの事コトは 信チミカの事コトは 尼ツクサの事コトは 弁カクサシの事コトは

凡ツラシの事コトは 信チミカの事コトは 塔アツクキの事コトは 寺コリクキの事コトは 香カの事コトは 雄トの事コトは 信チミカの事コトは 尼ツクサの事コトは 弁カクサシの事コトは

心ココロの事コトは 信チミカの事コトは 塔アツクキの事コトは 寺コリクキの事コトは 香カの事コトは 雄トの事コトは 信チミカの事コトは 尼ツクサの事コトは 弁カクサシの事コトは

院ヰンの事コトは 信チミカの事コトは 塔アツクキの事コトは 寺コリクキの事コトは 香カの事コトは 雄トの事コトは 信チミカの事コトは 尼ツクサの事コトは 弁カクサシの事コトは

院ヰンの事コトは 信チミカの事コトは 塔アツクキの事コトは 寺コリクキの事コトは 香カの事コトは 雄トの事コトは 信チミカの事コトは 尼ツクサの事コトは 弁カクサシの事コトは

身ミの事コトは 信チミカの事コトは 塔アツクキの事コトは 寺コリクキの事コトは 香カの事コトは 雄トの事コトは 信チミカの事コトは 尼ツクサの事コトは 弁カクサシの事コトは

身ミの事コトは 信チミカの事コトは 塔アツクキの事コトは 寺コリクキの事コトは 香カの事コトは 雄トの事コトは 信チミカの事コトは 尼ツクサの事コトは 弁カクサシの事コトは

弁カクサシ

物 ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり

右の片に ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり
下ろし ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり
ちりちり ちりちり

二条の内務省の ちりちり

ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり
ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり
ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり

ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり

内務省の ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり
ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり

ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり

ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり

ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり
ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり

ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり
ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり

ちりちり

ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり
ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり

ちりちり

ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり
ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり

ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり

ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり

花身餘清牙才一

栢木 横糸 鈴虫

才一栢木

以詞再新あ春若海式字八歳の春より栢木の
事からこころしほの徳牛一ひり

こころのちほのちあしむ

まじらひのちあはれはうらみあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

女三あはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

たすけのあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

世徳物神時年之三男新忠申納言心ちうらみあはれ

時業神経とよもやゆるまはれあはれあはれあはれ

大將とらまはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

石大弁の若 紅栢の石大弁の若

あはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

冷泉院

心はまはるる人かするるあはる

心あはるるあはるるあはるるあはるる
あはるるあはるるあはるるあはるる
あはるるあはるるあはるるあはるる
あはるるあはるるあはるるあはるる
あはるるあはるるあはるるあはるる
あはるるあはるるあはるるあはるる

あはるるあはるるあはるるあはるる
院のあはるるあはるるあはるるあはるる

石将軍あはるるあはるるあはるるあはるる

左右衛門府督一人相告由從四位下唐名入主吾將軍為中納言參議之人兼任之
あはるるあはるるあはるるあはるる

あはるるあはるるあはるるあはるる
あはるるあはるるあはるるあはるる
あはるるあはるるあはるるあはるる

あはるるあはるる

廿二横節

あはるるあはるるあはるるあはるる
あはるるあはるるあはるるあはるる

あはるるあはるるあはるるあはるる

あはるるあはるるあはるるあはるる

あはるるあはるる

あはるるあはるるあはるるあはるる

あはるるあはるるあはるるあはるる

あはるるあはるる

あはるるあはるるあはるるあはるる
此ハカク和名抄 亂波加久 毀蓋也

あはるるあはるるあはるるあはるる

とて新島集の事なりと云ふに
新島集の事なりと云ふに

何 竹
相 想
女 二
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十

何 竹
相 想
女 二
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十

あつた人徳をいそりたつてまはたみし
これをもとまはる事

いそりたつてまはる事

政を奉る徳のあらからん事

いそりたつてまはる事

人徳をいそりたつてまはる事

いそりたつてまはる事

いそりたつてまはる事

清かり物いそりたつてまはる事

いそりたつてまはる事

いそりたつてまはる事

向秀^{コウシウ}遺^{コウシ}山陽^{コウシ}白居^{コウシ}思^{コウシ}統^{コウシ}二康^{コウシ}周^{コウシ}津^{コウシ}人^{コウシ}吹^{コウシ}笛^{コウシ}作^{コウシ}思^{コウシ}同^{コウシ}賦^{コウシ}

いそりたつてまはる事

文選^{コウシ}第^{コウシ}賦^{コウシ}之^{コウシ}辞^{コウシ}取^{コウシ}米^{コウシ}議^{コウシ}用^{コウシ}泉^{コウシ}音^{コウシ}根^{コウシ}精^{コウシ}

無
作
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

院
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

うらうら子御

これの陽成院の御子と見えしは、改改院の御子
南宮と見えしは、自保親の御子と見えしは、
母深後名陽成院の御子と見えしは、
或る事と見えしは、
御子と見えしは、

丁島の事と見えしは、
吾々の事と見えしは、
ある事と見えしは、
うらうら子御の御子と見えしは、
うらうら子御の御子と見えしは、
うらうら子御の御子と見えしは、
うらうら子御の御子と見えしは、

うらうら子御

うらうら子御の御子と見えしは、
ある事と見えしは、
うらうら子御の御子と見えしは、
うらうら子御の御子と見えしは、
うらうら子御の御子と見えしは、
うらうら子御の御子と見えしは、
うらうら子御の御子と見えしは、
うらうら子御の御子と見えしは、

通録

山内通親の奉る名簿の事と見えしは、

名儒の遺布絶捧物をくまらなくてくまら
寺にまかせたるにまかせたはくまらなくくまら
くまらなくくまらなくくまらなくくまらなく
くまらなく

院の西にありてはくまらなくくまらなく
院の西にありてはくまらなくくまらなく
女にまかせたるにまかせたはくまらなくくまらなく
くまらなく

相にまかせたるにまかせたはくまらなくくまらなく
くまらなく

秋好中文字の事
くまらなく

くまらなく

くまらなく

くまらなく

くまらなく

くまらなく

くまらなく

信
名
增
島
彦
市
道
室
秀
夏
信

